

## H30年度Ⅱ期 個人企画

	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	K. P	ロンドン大学セントジョージ校	イギリス	H31/3/4-H31/3/29
2	J. Z	The University of Alabama at Birmingham	アメリカ合衆国	H30/11/19-H30/12/14

## 平成30年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 5年

学生氏名 K. P

### 一週間のスケジュール例

	月	火	水	木	金
午前8時～9時	術前 カンファ	術前 カンファ	術前 カンファ	術前 カンファ	脳腫瘍 合同 カンファ (～10時)
午前9時～午後3 時	手術見学	手術見学	手術見学	手術見学	手術見学

3月4日～3月29日までの4週間、医学教育振興財団のご支援でロンドン大学セントジョージ校大学附属病院の脳神経外科 (Neurosurgery) にて実習させていただいた。医学教育振興財団が選んだ日本の大学の医学部学生代表として、英国の医学部付属病院における臨床実習を通じて、臨床知識をはじめ、臨床現場における実践的な治療や保険制度などを学ぶことが目標とされた。日本全国の医学部学生が厳しい書類審査および英語・日本語面接試験を受け、最終的に19名の医学部学生が選ばれ、英国の6大学に派遣されることになった。本実習の応募条件に関しては、IELTSスコアの各分野 (Listening、Reading、Writing、Speaking) 及び総合評価 (Overall Band Score) 7.0 を必要とされ、高級英語力が必要な実習であった。

ロンドン大学セントジョージ校には、私を含めて4名の学生が派遣された。各学生は事前提案された診療科から、自分の希望診療科を選び、4週間の間その診療科を回ることにした。実習初日は抗体検査や書類提出が済んだ後、選択実習の学生 (Elective student) は病院のIDカードを交付してもらい、事前に連絡をとっていたスーパーバイザーに連絡し、実習診療科へ向かった。脳神経外科では、Consultantという専門医取得済の医師とレジデント (Registrar) が1対1のペアで一緒に働いていた。手術は毎日あったが、平日5日のうち、火・水・木は脳外科手術の日で、月・金は脊髄外科手術の日であった。現地の医学部学生は基本は脳神経外科を一週間しか回らず、しかも午後は手術室を退室し、神経内科外来を見学することが多かった。選択実習の学生のスケジュールに関しては、午前8時から午前9時まで術前カンファレンスがあり、そこで基本はConsultantとレジデントはその日の症例をディスカッションしていた。ただ、当日の症例だけでなく、珍しい症例や学ぶべきの症例があれば、Consultantがレジデントに質問したり、鑑別診断をあげてもらったりすることもあった。9時以降は基本は手術を見学していた。脳神経外科にはTheatre(手術室) 1～

Theatre 4があったが、Theatre 4には手術支援ロボットが設置されており、緊急手術がない限り、泌尿器外科に貸すことが一般的であった。当院は大学病院のため、脳腫瘍の症例が圧倒的に多く、その中、神経鞘腫が最も多かった。慢性硬膜下血腫に対する穿頭血腫洗浄ドレナージ術、脳動静脈瘻摘出術や脳動脈瘤クリッピング術などの脳血管疾患の手術も少なくなかった。その他、Deep Brain Stimulation(DBS)の植込み手術もみられた。脊髄外科手術に関しては、Laminectomy(椎弓切除術)が最も多かった。毎週金曜日に脳腫瘍合同カンファレンスがあり、脳神経外科、神経内科、放射線の先生方が集まり、脳腫瘍の症例についてディスカッションを行っていた。珍しくて、専門知識の必要な症例がメインであったため、学生にとっては難しい内容であった。脳神経外科は高い専門性が必要な分野のため、医学部学生が清潔にスクラブイン(scrub in)し、手術の手伝いをやらせてもらう機会は少なかった。手術を2~3件見学した後、解散となった。

高級の英語力が必要となった英国での臨床実習を通じて、医学英語や医療関係者とのコミュニケーションを実践的に練習することができた。日本で使われている医学英語は英国より米国の医学英語の方が多と思われるが、今回の英国での実習でOperation roomでなくTheatre、FeverでなくFebrileなどの英国版の医学英語を体験することができた。勿論、Consultantの先生方が非常に教育的であり、手術の手段や各段階の意味まで教えてくださった。また、ウエルカムパーティーなどで現地の学生と交流する機会が多く、日本一英国の保険制度やガイドラインの違いなどをデーマとして意見交換を行うことができた。現地の学生のみならず、世界中から来たElective studentたちと仲が良くなり意見交換の他に世界への認識が広がっていったと感じた。英国は最近単一民族社会からグローバル社会への転換しているため、医療現場でそのような多様性についても学んできた。

一方、日本医療について気づいたこともあった。まず、海外と比べ、日本は医療分野にテクノロジーを積極的に利用している。海外では、ガーゼ付着量測定装置や電動型タオルホルダーなどが使われていないようである。この点に関しては日本は非常に進んでいると感じる。ただ、英国を含めて海外の医学生は患者さんへの露出が多く、採血、ルート確保、初診をルーティン的に行っているようである。その結果、医学教育に関しては、学生レベルでの実践度が比較的に高いと考えられる。

本実習を行った結果、今後とも医学英語および脳神経外科を一層勉強していきたいと思う。将来日本国内で働くこととしても外国出身の患者を診たり、海外の研究所と協力したり、国際会議に参加したり医学英語に接する機会はあると思うので医学英語をしっかりと勉強しておきたい。今回は学生として脳神経外科を回ったため、積極的に手術へ参加することができなかったが、外科の基本を勉強しておいた上でなるべく早く手術に参加できるように尽力する。また、日本の医療を提供する者として将来さらに良い医療を提供できるよう、最後のローテーションまでしっかりと勉強していきたいと思う。

本海外実習に際し、奨学金を支援して下さった岸本先生、奨学金申請を許可して下さった医学科教務委員会、留学を許可して下さった先生方、申請書類の準備を援助して下さった教育センターの皆様、ロンドン大学セントジョージ校附属病院脳神経外科の先生方およびレジデントの皆様に心より感謝申し上げます。おかげさまで本実習の目標を達成することができ、大変有意義な勉強ができました。本実習で得た経験や知識を利用し、自分の成長および社会の向上を目標とし尽力して参ります。厚く御礼申し上げます。

岸本国際交流奨学金  
アメリカ・アラバマ大学病院実習報告

氏名： J.Z

・活動目的

私は将来アメリカで臨床研修を行うことを目標にしており、そのためにはアメリカでの臨床実習経験が必要です。運良く選考に合格したのは全米医学部のトップ30であるアラバマ大学病院（UAB）の血液幹細胞移植プログラムで、11月中旬から四週間実習をすることになりました。基本患者を診ることのできない日本での実習との違いを体験しながら、アラバマで知識と経験をたくさん吸収し、将来のマッチングに向けて準備をしたいと思います。

・活動内容

日記の形で毎日の活動内容及び心境を綴ります。

0日目（日曜）：大学側が用意した学生寮に到着。同じ訪問学生が他に8人いて、簡単に交流しました。このプログラムに参加する学生が全員アメリカのレジデンシーを目指して、実習経験及び推薦状を確保しに来ています。レジデンシーマッチングの大事な情報を教えてもらったと同時に、世界中にすごい人が多いなと改めて実感した一日でした。

1日目（月曜）：午前中からのオリエンテーション及びレントゲン撮影が終わって、BMT（Bone and Marrow Transplant）チームに案内されました。私を受け持つイタリア出身の Attending—Dr. Stasi が普段の活動を一日の回診等を通じて紹介してくださいました。BMTは血液・腫瘍内科の下に入るが、単独で病棟をワンフロア持っています。病室がすべて個室仕様で、ドアにガウン・手袋・マスク装着が必要かどうか書いてあり、感染症対策もしっかりしています。病気は多種多様だが、幹細胞移植がメインで入院される患者がほとんどでした。Dr.Stasiは回診中に非常に丁寧に問診、身体診察を行い、そして患者さん及びご家族の方々との交流にもたくさん時間をかけました。私にもひたすら解説をしてくださいました。

昼のミーティングはレジデントによる研究成果のプレゼンでした。UABのレジデンシープログラムは非常に **competitive** で、レジデントの仕事も忙しいと聞きましたが、その中から時間を見つけて研究を行い、立派な発表までできるのに感心しました。

初日は見学形式で終わってしまいましたが、二日目から患者さんを一人から徐々に受け持ち、問診・身体診察・薬の処方等を全部私がファーストタッチでやっていくと最後に説明してくださいました。日本と全く違う形の実習になりますので、期待と不安を抱えながら、Dr.Stasiからもらったガイドラインと論文を読んで明日に臨みます。

2日目（火曜）、3日目（水曜）：朝九時からの回診には医師のみならず、薬剤師、看護師や Nurse Practitioner も共同に積極的に参加しました。最初に会議があって、患者11人にたっぷり時間をかけて問題点を共有し、マネジメントプランを立てました。その後は初日と同じように Attending と病室を回りましたが、身体診察をさせていただきました。残念ながら診察記事などを書いたりする時間がなかったようでしたが、徐々に増やしていくと言われました。午後には移植予定患者のコンサルトが2件あって、Dr. Stasi がそれぞれ十分に時間をかけて移植について説明しました。時に冗談を混じりながら、患者と家族の生活面の問題も良く傾聴し助言をしたところは日本と少し違うようです。

帰りに Dr. Stasi を捕まえてこの実習を良く行うにはどうすればいいかとアドバイスを求めました。暗くなったので寮まで送ってもらいました。

移植患者のケアは少し特殊で、医学生私のみに難しい所がいっぱいありますが、Attending の Dr. Stasi がとても忙しく、なかなか質問がしづらいと感じています。学びたい、Attending に認めてもらいたいのであれば、もっともっと積極的に質問をしなければならないと思いますので、明日から改善をしてみます。

4日目(木曜) : BMT担当の Attending が Dr. Shelton に変わりました。Thanksgiving でもあって、病棟からスタッフも患者さんも激減してかなり静かになったが、当直の看護師さんや Dr. Shelton が手作り料理を持ち合わせして病棟で七面鳥などを食べながらパーティーしました。Dr. Shelton は非常にフランクで質問しやすく、丁寧に説明やベッドサイドレクチャーをしてくださいました。勇気を出して、患者さんを受け持って、問診したり診察したりカルテを書いたり、そして回診時にプレゼンしたりして、勉強させてもらえないかと聞いたら Dr. Shelton が快諾し、一番簡単そうな多発性骨髄腫の自家幹細胞移植後フォローのケースを指定してもらえました。患者さんは学生と聞いたらとても協力的で今までの経過や現在の主訴を説明して、身体診察もさせてもらえて、とてもスムーズでした。帰宅後も多発性骨髄腫の移植手順や移植後管理などについて UpToDate で調べて勉強しました。アメリカでは自分のしたいことを大声で言わないとさせてくれないし、逆にやりたいことがあってそれに向けて頑張る人が評価されるとよく聞きますが、ようやくそれはどういうことなのかを身をもって体験できました。

5日目(金曜) : 金曜も Thanksgiving 直後なのでさほど人がいません。回診のときに Dr. Shelton も忘れずにプレゼンテーションの機会をくださいました。プレゼン後に患者さんに何をしてあげたいかと聞かれて、学生にもきちんと自分で勉強して、考えて、意思決定をするプロセスを大事にしているなど感動しました。終了直前に、前日夜に調べた多発性骨髄腫の移植法そして移植後管理について自分の理解を一通り確認し、質問にもゆっくりと答えてくださいました。You are doing a good job! と褒められたので、来週からもっと積極的に学んでいこうと思います。

8日目(月曜) : Thanksgiving 明けはスタッフも患者も増え、いつもどおりの忙しさに戻りました。再診患者の問診、診察、カルテ記入をすることができて、Dr. Stasi に Step2 CS に向けて Open ended/ close ended question の切り替え方、診察所見の書き方など、たくさん教えて頂きました。病棟では二人目の患者を担当することにもなり、少しずつやるが増えてきました。病棟担当の Dr. Shelton はプレゼンテーションの時間を確保して、質問すれば必ずきちんと答えて、レクチャーもしてくださいました。BMT チームではレジデントや学生がいなくて、レジデンシーのマッチングの話が聞けないのは残念だが、他の国からの訪問学生と仲良くなったので、日本でなかなか入手できない情報をたくさん仕入れることもできます。

9日目(火曜) : Dr. Stasi の外来で実習をしました。移植後フォローで身体状況があまりよろしくなく、少しそっけない患者さんで、はじめて単独での問診、身体診察とカルテ記載なので、緊張してあまりにうまく言葉にできなかつたりして患者さんに不快な思いをさせていないかと心配していました。何よりも Deep South のアクセントにまだ慣れていなくて、普段なら周りとの会話から理解を補うことができるが、一人で診察するとやはり分からない部分も多く、実際カルテにも何箇所か記入できなかった所がありました。それでも月曜よりは問診の流れや質問の展開などがだいぶ良くなったのは成長でした。来週の外来でもっと患者を診たいと Dr. Stasi をお願いした所、そろそろ幹細胞移植後のフォローやマネジメントなどにも参加してほしいから、ガイドラインなどを勉強するようにと言われました。

10日目(水曜)、11日目(木曜)、12日目(金曜) : 二週目の後半は Attending の Dr. Shelton が忙しく教育イベントは特になかったですが、担当の患者さんを毎日診察して、カンファや回診時にプレゼンや報告をすることで幹細胞移植後のサポートケアについて勉強をしました。アメリカと日本の大きな違いは医師の役割です。日本ですと、薬の処方から書類の作成まですべて医師が担当するのですが、アメリカでは医師が意思決定をしてから、残りの仕事は看護師や Nurse Practitioner がしてくれます。一部の処方は Nurse Practitioner でもできます。そのおかげか、医師が診察にかかる時間はとてつもなく長くて、回診時に 30 分以上かけてじっくりと患者さんと話し合うことも何度かありました。

15日目（月曜）：初めて担当となった患者さんが今日退院となりました。握手して感謝されたのはやはり嬉しいです。毎日朝と夕方に会いに行き、細かく身体所見を取って、**Attending**に欠かさず報告していました。たまには私だけが気づいた所見があれば、**Attending**を含めて周りに褒められます。病棟のスタッフともだんだん仲良くなれて、雑談もするようになりました。

16日目（火曜）：終日 **Dr. Stasi** の **Clinic** にいました。新患がいたので、他院より取り寄せたカルテなどから大事な情報を抽出してパソコンシステムに打ち込みました。その後、二人の患者のカルテを勉強してから独自で診察して、担当の **Nurse Practitioner** 及び **Dr. Stasi** にプレゼンした後に一緒に診察しました。**Dr. Stasi** の問診に比べて聞き漏れた事項が多く、医療を提供する側としてはまだまだだと改めて実感しました。

17日目（水曜）、18日目（木曜）：水曜より **Attending** は3人目の **Dr. Salzman** に変わりました。**Dr. Salzman** は **BMT** 部門の **Professor** でチームリーダーです。かなり個性的でスタッフに好かれていて、臨床経験がいかにか豊富か回診すればすぐに分かりました。**Dr. Salzman** に患者を担当して回診のときにプレゼンしたいとお願いしたら快諾してくださいました。木曜の朝にプレゼンしたらアドバイスをたくさん頂きました。

19日目（金曜）：今日は **BMT** のクリスマスパーティーでした。病院一階のホールでテーブルがいくつか置かれて、ホットフード、果物、ケーキやジュースなど食べ物が用意されました。**Professor** の **Dr. Salzman** が発言した後、さらに **Dr. Stasi** が率いるバンドの演奏やプロ歌手によるクリスマスソングのコンサートがあって、なんとピエロとサンタクロースも雇って来ました。病棟のスタッフももちろん、フォローアップ中の患者さんやその家族も招待され、医療スタッフと患者さんのつながりをいかに大事にしているかを体験できました。

22日目（月曜）：アメリカに来て初めて死を看取りました。患者さんは幹細胞移植歴があり、不明な肺病変で緊急入院しました。**GVHD** ではないかと疑われましたが、生検する猶予もなく急に悪化したので呼吸器チームをコンサルトして挿管してもらいました。その後も状態が良くならず、もう希望が薄く、抜管して楽にさせないかと患者の奥さん相談したが、なかなか現実を受け入れられませんでした。奥さんは一週間ほど迷い悩んだ末、ようやく今日抜管すると決断を下しました。**Attending** の **Dr. Salzman** が奥さんと患者さんに優しい言葉をかけ、最後の最後までずっと付きっきりでした。その間、奥さんに出会いのエピソードを話してもらい、悲しい雰囲気の中でも死を明るく受け入れようという姿勢でした。アメリカは移植大国でもあって、今回は **GVHD** が臓器に浸潤して移植に使えなかったが、両目を研究の目的で使うと患者の家族の合意を頂きました。

23日目（火曜）：火曜日は **Dr. Stasi** の外来の日です。症例を頂いて、カルテを勉強して問診と身体診察をしてから **Dr. Stasi** に報告するのはもうルーティンになりました。午後は脱出して、この実習プログラムを管理している **Dr. Zayzafoon** に面会しました。**Dr. Zayzafoon** は **International Medical Graduate** のレジデンシーマッチングに長年携わっておりますので、マッチングに向けてどのように準備をすればいいかアドバイスを頂きました。特に卒業年数が非常に大事で書類審査でフィルターを掛けているプログラムが多く、できれば卒業してすぐマッチングに参加したほうがいいとおっしゃいました。**USMLE** の点数ももちろん高ければ高いほどいいが、研究成果や **Personal Statement** などをもとに面接のオファーをするかに判断されます。

24日目（水曜）：午前中の回診が終わって、**Dr. Zayzafoon** と他の国際留学生とのランチ会でもう一度マッチングについて質疑応答をしてくださいました。お互い把握している情報を共有したりしていました。実習もそろそろ終わりに近づいているので、一人ひとりフィードバックをしました。ランチ会の終わりに **Dr. Zayzafoon** から **UAB** の **T** シャツをプレゼントしてくださいました。

25日目（木曜）、26日目（金曜）：最後の2日は **Attending** が再び **Dr. Shelton** に変わりました。担当の患者さんについて回診時に発表しましたが、一番最初と比べて少しは成長したのかなと思います。**Dr. Shelton** からもマッチングに向けてアドバイスを求めました。他の人より目立つためにはやはりローテや見学の時に身を乗り出して、**Sponsor** の先生の所で研究に手伝ったり、仕事をしたりしなければ、推薦状を書いてもらっても、長年面接してきた先生にはすぐにわかるとおっしゃいました。

#### ・総括

今回は **UAB** で血液幹細胞移植というローテで実習させていただきました。**UAB** 病院は全米でも非常に著名で、レジデンシーやフェローシップは人気です。ハリソン内科学の著者であるハリソン先生はまさに **UAB** で勤務されていました。上級医の先生方だけではなく、レジデントの先生方も **Research mind** に富んでいるので、とても刺激となる場所でした。血液幹細胞移植というローテ内容は医学生にとって非常に難しく、来年からなくなるようですが、毎日少しずつ自分を追い込んでチャレンジしてきました。最初は南方アクセントに違和感を抱いてしまい、人と話すのを恐れていました。実習終了時にはもう患者さんとお話するのが楽しくて、もっともっと一人で患者を診たいと思うようになりました。言葉の壁も大きいですが、東アジアの文化で育った私にとっていかに積極的に動くかは一番の課題です。残りの **USMLE** 試験もちろん、これから初期研修の二年間内に **Comfort Zone** から抜け出すのを目標にしたいです。